

# 大学院での教育研究を振り返って

## —「学問による人間形成」の実現に向けて—

川 辺 純 子

### 1. はじめに

新型コロナウイルス感染症が発生し政府が緊急事態宣言を発令して以来、自粛生活が続いている。その最中の4月16日、芸術がまさに本領を発揮した出来事があった。感染が集中するイタリア北部、ヴァイオリンの町クレモナの病院の屋上で、日本人ヴァイオリニスト横山令奈さんが医療従事者と患者たちへ、再び音楽や芸術を楽しめる日が来るようにと、祈りを込めてヴァイオリンを演奏する姿が放映された。横山さんのヴァイオリンから流れる音色に、心が洗われる思いであった。おそらく、豊かになった一人ひとりの心が世界へと広がり、新型コロナがもたらした困難を乗り越える勇気と希望になったであろう。クレモナでのヴァイオリン演奏は、音楽がまさにその役割と意義を果たしたことを示すものであった。

芸術と同様に学問（教育研究）も、その役割と意義を担っている。大学の役割・意義は研究・教育を通じて知の追究を行うことであり、その意義は社会に有為な人材を育成することである。研究は継承・維持・開発を含み、教育は学問の次世代への伝達、それを通して次世代の教育・育成を担うものである。大学は学部そして大学院といった段階に応じた教育研究を行い、社会に役に立つ人材の育成を行っている。学部で学ぶ幅広い教養教育ならびに専門・基礎教育は、専門の基礎となる知識や方法論を身につけ、ものの見方、考え方に偏りが生じないために行われる。こうした教養的な知識や方法論を身につけたうえで、大学院では特定な専門分野のより高度な教育が行われる。専門性とは、特定領域に関する高度な知識と経験をいい、専門性を通じて分析・問題への対応力を養うものである。

社会の諸制度は時代と共に大きく変容する。しかし、大学は組織・機能・運営の基本において、ほぼその原型を変えることなく、存続・発展してきた。その理由は、大学の理念のなかに、知識と認識の探究、世代と社会層の枠を超え、また、時代と地域を超えた文化と文明の接触を通じて、体系化を求める学術的追究つまり真理の探究の精神が内在しているからである。大学の役割は変わらない。だが、科学・技術の進歩により社会が変わっていく。大学においては、普遍（教育研究）と変化（社会に役立つ人材育成）の両面に対応することによって、大学の意義を果たすことができる。

今、「情報・デジタル社会」ともいべき新たな時代を迎えて、本学では学部ならびに大学院がともに社会に役立つ人材の育成が求められている。今回、大学院経営学紀要委員会から退任記念特別寄稿の機会をいただいた。私の教員生活を振り返り、本学経営学研究科が新たな時代を迎えて、今後本学の理念である「学問による人間形成」を、どのようにして実現できるかを考えてみたい。私は定年で大学を退職した。だが、研究者には定年はないので、教育研究について考えることは意義があると思っている。

本稿では、まず、私の本研究科での教員生活を振り返り、専門教育の役割を確認する。次に、本学の理念である「学問による人間形成」がめざす人材育成に触れる。最後に新しい時代における本研究科の教育研究の在り方について述べる。

## 2. 経営学研究科での教育研究

私は社会人生活をつづけながら40歳代後半、大学院修士課程・博士課程に進み「アジア経済」を専攻した。約10年間にわたる研究の指導と訓練を受けたのち、2004年に城西大学経営学部に助教授として就任した。学部では3・4年生向けの専門教育科目として、「アジアの産業と企業Ⅰ・Ⅱ」を担当した。その後、教授昇格に伴い、経営学研究科の授業を受け持つこととなった。大学院では約10年間にわたり、特論「アジアの産業イノベーションA・B」を担当、修士論文の指導と訓練に携わってきた。

修士課程の集大成とされる修士論文の指導では、問題意識の部分が最も難しかったと思う。ゼミ生を担当し研究テーマを聞くと、「自動運転について研究したい」とか「電子商取引について調べたい」など、大きなテーマについての返事が返ってくる。ところが、「自動運転の何が問題で、それをどのように明らかにするのですか」と尋ねると、「……」と返答はない。

大学院での指導は、「問題の本質を捉え、それをどのような方法で、明らかにするのか」といった一連の訓練の繰り返しであった。まずは、文献読解が基本である。授業は課題図書を読み、毎回発表者がレジュメ作成・報告、そして質疑応答といった形式で進めた。多くの分野、テーマに関する文献読解を通じて、研究者たちがその時代に起こっている現象に対して、どのような問題があるかを提起し、それを、いかなる方法で、どのように証明しているのかを読み解く訓練をする。この訓練から研究が、「問題の本質を見抜き、何らかの方法によって、問題を明らかにする」ということを学ぶ。この訓練には時間が必要である。ゆえに、大学院生には研究に没頭できる環境と時間が求められる。

こうした訓練を経て、各自の専門分野・テーマに置き換えて、「問題提起・方法論・証明」を考える。この際には、まず、先行研究を行うことが欠かせない。というのも、修士論文にはオリジナルな研究が求められるからである。オリジナルな論文を書くためには、(1)これまで誰も取り上げなかった問題を明らかにする、(2)すでに研究されている論文の問題を発見し批判・再解釈する、といった2つの方法しかない。私は大学院生には、(1)の研究を薦めている。(2)を行うためには、相当の研究の蓄積が求められるからである。

次は、資料収集である。(1)では、これまでの研究者が利用しなかった資料の発見、(2)においては、従来の資料に加えて新たな資料や視点の発見というように、いずれにしても問題を証明するための資料を欠かすことができない。どちらの研究を行うかが決まると、方法論である。方法論では、文献が存在すること、実証研究の場があることが重要となってくる。

そして、いよいよ修士論文の枠組みと構成を考える。私は、ゼミ生に「何が問題で、どのような方法で、具体的に何を明らかにして、実証するのか」を確認するために、修士論文の概念図を作成する指導を行ってきた。概念図を作成させる理由は、途中で自分が何をしたいのかわからなくなり、問題意識から脇道にそれてしまい、論理的に問題を明らかにできないゼミ生に多く接してきたからである。概念図は目次作りにも役にたつ。論文執筆の過程では、概念図に沿って作成が進んでいるかを確認していった。そして、結論では概念図の空欄が埋まることになる。

大学院では専門教育を通じて、一人ひとりが「問題の本質を捉え、解決方法を考え、知識や経験を通

じて解決する」といった基本的な問題意識と問題解決の方法を、身につけることが大切だと考えている。なぜならば、一人ひとりの問題発見・解決力こそが、社会が抱える問題を解決する力となり社会の役に立つからである。

### 3. 「学問による人間形成」と経営学研究科

大学は学部・大学院と段階を経て、教育研究を行い社会に役に立つ人材の育成を行うといった共通の使命を担っている。しかし、各大学は独自の理念を通じて社会に貢献する人材を育成することが、その存在を示すことになる。

城西大学の創立者水田三喜男は、「学問による人間形成」を理念として掲げ、1965年に総合大学を創設した。水田は、「学問はそれ自体が目的ではなく、あくまで人間形成の手段である。」と述べ、教員と学生に対して次のような期待をしている。「優れた研究者で見識の高い教育者を教授陣に迎え、その智と和を一体とした熱意ある指導のもと、高き理想をもち、真理と正義にひたむきで、英知と人間愛と勇氣に充ち、精神的推進力を持った現下社会の要求する有用な人材の育成を目指して、特色ある学風を創り、国家社会の発展に寄与したいと念願している」（城西大学HP）。いうまでもなく、正義は、真理に裏打ちされたものでなければならない。

本学でも創立以来、こうした理念の下で、学部さらに大学院を順次創設して、社会に役に立つ人材の育成に努めている。国や地域を単位として、均一・同質・標準化を求める工業化社会においては、問題は限定的で同質的であった。そのため、特定領域の専門性によって場当たりの対応することができた。大学院においては、個別教員の専門性を軸に教育研究を行うことで、専門内で問題を解決する力を養うことができた。

しかしながら、1990年代後半以降、科学技術の高度化、社会・経済・文化のグローバル化により、日本の産業構造は工業社会から情報・デジタル社会へと大きく転換した。ヒト・モノ・カネ・情報が瞬時に地球を駆け巡る社会では、問題は多様化・複雑化している。一つの専門内では多領域にわたる問題へ対応できなくなっている。社会変容を受けて、大学院においては、各専門性をネットワーク化した高度専門性の教育研究が求められているのである。

文部科学省は、2003年に専門大学院を設置し、法律分野での高度専門職業人を育成する枠組みを作った。高度専門職業人とは、社会経済の各分野において指導的役割を果たす、高度で専門的な職業能力を有する人材をいう。その後、文科省は「生涯学び続け、主体的に考える力を持ち、未来を切り拓いていく人材の育成」方針を打ち出し、大学・大学院改革を要請している。高大接続改革では、高校教育改革、大学教育改革、それをつなぐ大学入試改革の三位一体の改革が求められている。その一環として、2017年4月より、大学・大学院は質的転換を図るため、3つのポリシー（①「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、②「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）、及び③「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー））の策定・公表を義務付けられた。

さらに、2019年には、「2040年を見据えた大学院教育のあるべき姿」のなかで、大学院修士課程は、「高度専門職業人」「高度で知的な素養のある人材」の育成を主な目的として位置づけられた。俯瞰的な能力を養うために、コースワークと研究指導の適切な組み合わせ、学部教育との有機的な接続が望まれている。具体的な取り組みとしては、学部段階での教養教育ならびに専門・基礎教育の成果を受け継ぎ、主専攻・副専攻の深化を図るための教育が求められている。高度専門職業人育成にあたっては、高

度かつ広範な専門的能力，実践的な研究能力の育成，実務家教員の積極的な配置，専門職大学院における「教育課程連携協議会」に類する枠組みを活用することが要求されている。

本経営学研究科ビジネスイノベーションシステム専攻修士課程においても、「高度かつ広範な専門的能力と実践的な研究能力の育成」を行い，高度専門職業人を輩出することが求められている。

このように，文科省は大学院修士課程における方法論を示している。しかしながら，これはあくまで大学が，教育研究を通じて「知の追究」を行うという普遍的な役割を，担っていることを前提としていることを忘れてはならない。

#### 4. 新しい時代における経営学研究科の教育研究

本研究科では，建学の精神である「学問による人間形成」に基づき，「グローバルとローカルの視角を持ち，社会に貢献するビジネスのプロフェッショナルを育成する」ことを目的としている。そして，「マネジメントのイノベーションを通じて，地域社会や国際社会に役立つ人材を育成し，産業や文化の発展に寄与することを理念」として，教育研究を通じて，高度専門職業人の育成をめざしている。

そうしたなかで，先述したように2019年に大学院修士課程は，高度専門職業人を育成するために，具体的に「高度かつ広範な専門能力，実践的な研究能力」の育成を要請されることとなった。個別教員の専門性だけでは，高度，広範かつ実践的な専門研究能力を育成することはできないため，本研究科は組織的に個別教員の専門性を強化（競争）するとともに，個別分野の高度専門性を体系化（協力）していくことを求められている。本研究科はその実現に向けて直面している課題を乗り越え，期待に応えていかなければならない。

その実現のために必要なことは，第1に，いかに個別教員の専門性を強化するのかということである。教員は専門性を深化させるとともに，新たな知見を研究に取り入れていくことで，専門性を追求していくことが出来る。教員はその結果を研究論文として発表し，評価あるいは批判される。評価・批判されることによって，教員はその専門性をさらに強化していくことになる。そのため，論文を評価・批判する教員も高い専門性をもっていなければならない。さらに，自由かつ活発に評価・批判できる環境が整っていることも重要である。

第2は，いかに総合的・統合的にカリキュラムを，策定・実施，評価する体制を構築するかである。領域を超えた教員の共同研究，必要とされる新領域の教員採用などはもとより，教員のコミュニケーションを深め，専門性のネットワーク化を図ることも有用であろう。

第3に，3つのポリシーが抱える課題への対応がある。ディプロマ・ポリシーで掲げている「高度職業人の育成」においては，高度な専門性を何で図るのかという課題を抱えている。基本的には，高度な専門性は修士論文に集約される。したがって，教員の高度な専門性に対する認識と，修士論文には一定の水準を満たすための厳しい審査・評価が必要である。

カリキュラム・ポリシーで掲げている「必須科目と選択科目」については，どのようにして全体的議論を行いカリキュラムを構築し，いかに授業を通じて高度専門性を学生に伝達するかが問われている。カリキュラムツリー，ナンバリングはすでに作成されているが，その適合性，新領域の追加などの見直しが必要であろう。学生に対しては，目的を明示し段階的に達成度を確認することが求められる。

アドミッションポリシーでは，「高度職業人となる意欲と学力を有する人」を求めているが，意欲を何で測るのかといった課題に直面している。学生の意欲は，書類審査・面接を通じて測る。そのため，

教員が学生の意欲に対する共通認識を持ち、同じ基準で評価することが必要であろう。

本研究科は、新たな時代を迎えて専門性の強化と体系的な高度専門性体制を構築して、高度専門職業人を育成することが求められている。本研究科の高度専門職業人育成への取り組みは、本学の理念である「学問による人間形成」の実現への道であるといえる。「学問による人間形成」が問われるのは学生だけではない。教員もまた生涯を通じて、「学問による人間形成」を問われているのである。大学を定年退職した現在、これまでに幾度となく唱ってきた学歌に、改めて城西大学の教育研究の原点を見る。「高き理想を胸ぬちに燃し、真理と正義ひたに求めん」(草野心平作詞・学歌二番)。

芸術は一人ひとりの「心」を豊かにし、その心が世界へと広がり世界が抱える困難を乗り越える力となる。学問もまた一人ひとりの「知」を豊かにし、その知が世界へと広がり、世界が抱える問題を解決する力となる。そうなったとき、大学・大学院における学問は、その意義を発揮することができるのではないだろうか。

#### 参考文献

- 大西健夫 (2016) 『ドイツの大学と大学都市』 知泉書館。
- 佐藤瑠威 (2014) 「研究ノート 哲学とは何か——生きる意味の問題をめぐって——(1)」『別府大学紀要』別府大学。
- 杉浦岳志他 (2016) 「研究ノート 大学での学びと社会のつながりに関する考察」『筑波大学キャリア教育研究』創刊号。
- 文部科学省中央教育審議会大学分科会 (2019) 「2040年を見据えた大学院教育のあるべき姿～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～(審議まとめ)」。